
山頂の事件

よつつん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

山頂の事件

【Nコード】

N 6 4 6 4 A

【作者名】

よつつん

【あらすじ】

迷推理を必ずした後名推理をする迷・名探偵の尾島健也の息子、尾島健次が4泊5日の宿泊学習に行った。そこで、誘拐や宝探しの事件がおきる。お父さんのいない中で健次は少年探偵団を作った。誘拐事件を健次は解決することができるのでしょうか。

序章（前書き）

この作品は始めて僕が作ったのでおかしな点があるかもしれません
が気にしないでください。

序章

明日は絶対楽しい日になるー。なぜかという今日は、初めての森林学校だー。・・・というわけで今から始まる物語はその初めての森林学校で起きたことです。

一日目寝ているときに先生の見張りがついている場所で誘拐された。そして二日目にみつけた不思議な紙と書かれたこと。そして、幽霊。さらに、健也と警察の関係と間でおきた事件と人間消失事件とそれにかかわってくる男の

メインの一つの事件＋宝探しの謎一つ＋オカルト＋後日起きた事件二つ＋謎の男の推理小説です。

まずは物語を始める前に、登場人物の紹介をしましょう。

まずは語り手である僕、姓は男（あつ、名前を見ればわかるか）の尾島健次です・・・うーんあまり僕って特徴ないなあひとつあるとすれば

パズルが得意ぐらいかなあ。まあこれから話を進めていくわけだからそれを見て

性格などを考えて下さい。（ちなみに茶木茶木小学校の四年生です。）

次は主人公で姓は男（「だからわかるって」ってツツコミはやめて下さいね）の尾島健也、

僕のお父さんです。・・・うん！これはいっぱいありそうだ。

まず職業は新聞記者で迷・名探偵（これの意味は後で説明します）。性格は、

まず目立ちたがり屋で自信過剰のお父さんです。

後は、お父さんはある一部の上司の言うことなら何でも聞いちゃう。だけど、自分が認めない人の言うことは、絶対に上司でもいうことを聞かない。

今、僕が知っている、言うことを聞く上司さんは一郎さんとお父さ

んの幼なじみの正一さんだ。

次に言くと、さっき言った迷・名探偵という言葉の意味は迷探偵でもあるし名探偵でもあるということだ。

つまり、お父さんは絶対最初に迷が何個かつく推理をする。つまり迷・迷推理とか迷・迷・迷・迷推理とかだ。

そのときあきれて帰られそうになると必ず何かひらめく。

それはもし、一回目が迷推理か迷・迷推理だったら名推理だ。

もしそれ以上だったら迷がひとつづつなくなっていく、

つまり失敗は成功の元というけどひとつの事件に必ず一回は間違える、おかしなお父さんなんだ。これでお父さんの紹介は終わり・・・かな？

とにかく、次は僕のお母さんで姓は女だからシレコはやめてねの尾島昌子です。

これもあまりないけど、あまりこの物語には出ませんからちよつと説明します。

えーお母さんはパズル好きで、よく夕食のときなどにクイズを出します。

僕のパズル好きはそこで教えてもらっているからだ。

後はさっきも言ったとおり出ないのでかかないで、あと出るのは、僕と少年探偵団を作る次郎・角田・真太・正太郎と警部補の健也の幼なじみの真京太郎と

クラスメイト・先生や警察のその他大勢です。（ああ、みんながその他大勢って何だよ！っていきそう。）

とにかく登場人物紹介は終わったのでこれから物語を始めます。

第一章 事件が始まるまでの時間<1>

ふぁーあ、すっげー眠いよ。昨日、今日が森林学校って言うことでうかれちゃった。

まあ重い荷物を持てばきつと眠気も覚めるだろう。なんたって今日は初めての森林学校の四泊五日の内の一日目なんだから、

荷物も多いんだ。とにかく今日起きたらお母さんが弁当を作っておいてくれるだろう。と思っていた。

でも甘かった、おにぎりどころか起きていなかったのだ。

寝坊をしているお父さんを横目でにらみながら（どうしてにらんだかは後で言う）お母さんを起こしにいった。

学校に行かなきゃ行けない時間は七時、今は六時なので時間がない。僕はお母さんを起こすと、またもお父さんを横目でにらみながら、簡単なものを作っていく。

たまごやき・鶏肉・おにぎり・デザートのイチゴなどをどんどん入れてく。

何とかできてできるだけつめこむとリュックの中に入れて家から出て行った。

すると、実は簡単なものを作っていたので、たった三十分でできていたんです。

つまり、急いで出たので三十分ごろだ。そして急いで走っていったら五分ぐらいでつくことになる。

そして、三十五分に着いたら門は閉まっていた。そして、時間を間違えたのかと考えながら歩いてうちに帰る。

一時間早く来ちゃったのかな？

とか

まさか、明日遠足の日じゃないよね？

とかを考えながら歩いて帰ると家への道は十五分、うちに着いたら五十分ぐらいだった。するとお母さんがおきてきて

「あら、おきていたの。じゃあさ、ちょっと朝ごはん作ってくれない。

もし作ってくれないのなら今年はまだゲームも漫画も本も買わないしお年玉も渡さないからね！」

ほとんど脅迫じゃないか。

二つ目の。から鋭くなったお母さんの口調にこう思った僕は頭を抱えたくなったが、

しょうがなく朝ごはんのおにぎりを作ってあげた僕もひとつを急いで食って、時間を確認する。

なんともう五十五分になっていた。お母さんが

「いつてらしゃい。。」

といったのを、いつてきますとも返さずに、急いで出て行った。

そして学校に着くともうすでにみんな着いていてバスに乗る準備をしていた。

何とかバスが出るには間に合ったが、茶木茶木小学校は時間に厳しく、

クラスの中で一番来るのが遅かったものは、遅刻マンなどという名前をつけられて、

しかも三日連続で遅刻マンになると遅刻大王になるという伝統があるだから僕たちは

こんな伝統いらねえだろ。といつも思っている。つまりぼくはその遅刻マンになってしまったわけだ。

幸いにも今までいつも早く来ていたので遅刻大王にはならなかったが、

いつも早く来ていたのでみんなにずっとひやかされた。とにかくバスは出発して各班のレクが始まった。

第一章事件が始まるまでの時間<2>

茶木茶木小学校ではひとつの学年に二つか三つクラスがある。四年生は三クラスで、

班は十班まであつて、一班から三班が一組で四班から七班までが二組で一番多いのが七班から十班までの三組だ。

一組と二組は一つの班の人数が六人ぐらいだけど三組は一つの班の人数が十人もいる。僕は三組の八班だ。

バスは全部で四台あつて一号車は一班の男と四班と七班だ。

二号車は一班の女と五班と八班だ。僕はこのバスに乗っている。三号車は二班と六班と九班だ。

最後に四号車は三班と七班と十班だ。

バスは小型だけど一号車と二号車はけっこうあいている。

だけど三号車と四号車はぎゅうぎゅうでレクどころじゃなくなる。

僕も三年のときの遠足で同じようにバスに乗ったけど運悪く三号車でマイクを使って

話し始めようとするとなんかがぎゅうぎゅうづめになって、

なぞなぞを出すところは書いてある答えを見られたりして大変だった。

しかも、一息つこうと背伸びをすると立っていた女の子を触ってしまった。

「なにすんのよ!」

て叫ばれてしかも思いつきりけられて大騒動になった。

僕はそのだいそうどうのとき女の子を触った子の横にいて女の子を触った子に向かって女の子がやったけりが、

横にいたこの僕に思いつきり当たった。しかもバーのようなところではおづえをかいていたので思いつきり頭にぶつかった。

さらに、不幸は重なり、その子は空手を習っていて有段者だったのだ。

結果、僕は覚えてないけれどそのままその場で気絶したらしい。

しかも、そのとき僕は一週間、記憶喪失だった。僕は、一週間後、見舞いに来たけてきた子がこう言って頭をたたいてきた。

「まあそんな変な顔すんなよ。」

そして、頭がただでさえくらくらしていたのに頭をいきなりたたかれたので僕はまた気を失った。

そして五時間後、ぼくはやっと意識をとりもどして記憶も取り戻したらしい。

なので、バスの三号車と四号車と、空手の有段者の女の子は僕の天敵になった。

だからどうしても七班か八班になりたかった。

今年は何とかなれてよかったけど油断せずに、来年からもどんな人と一緒になっても七班か八班になりたいと

思っている（でも空手の有段者の女の人はやっぱりヤダ！）。

では暇つぶしにレクででたなぞなぞを十連発（答えは泊まる場所へついてから！

1 熱があるときは走り回って働いて熱がないと休むものって何だろう

2 突然おなかを壊したとき病院まで何秒かかるでしょう。

3 笑いながらあめを食べたときあめは何個たべたでしょう。

4 えんぴつを使わずに目をつぶって書いたものなんだろう

5 顔の真ん中に「つ」の字をつけて泳いでいる魚ってなーんだ。

6 ワニ+ワニは何だろう

7 絵を書いて見せたらひらがなの「え」をかいて。とつけられた。さてどういう意味だろう？

8 おじぎを何回もして頭をぶつけると役に立つものなーんだ。

9 柿の木を見るとおながが減りみかんの木を見るとおなががいっぱいになった。なぜ？

10 毎日朝もひるも夜も追いかけてっこをしているのっぽとちびのものってなーに。

そして、今日お父さんをにらみつけた理由とはじつは、今日お父さんが森林学校に来ることになっていいるからだ。

まず最初はお父さんのわがままな言葉から始まった。僕が森林学校に行くということをお父さんに言ったら

「えー、そんなこと早く何で言ってくれなかったの！いくよ！先生たちには取材ということで一緒に行くよ！」

とお父さんが言い始めたのだ。

こういうことはわかっていた。お父さんは大の山好きだ。こんなことを言われたら、何をしてでもいくに違いない。

ただどあえて言ったのは絶対こないと思ったからだ。

パパは上司の言うことなら何でも聞くので上司の一郎さんに頼んでみんなが行ってもいいといわないように

上司のみんなに頼んでもらうんだ。そういうことで一度はほっと安心したんだけど、甘かった。

ある日、上司の一郎さんがうちに来て今度の取材の打ち合わせに来た。

そして最初は大丈夫だと思って自分の部屋でゲームをして遊んでいた。

そしたらお父さんによばれた。

それで歩きながら客間に向かって行くとお父さんがこんなことを話していた。

「実は、今度息子が森林学校に行くんですよ。それについていつてそれでその滝川荘というところに

取材ということで行きたいので、時間をくれませんか。」

そして、お父さんが僕に気づいた。

「あつ来た来た、おい健次！今一郎さんに森林学校のことお話しているんだ。」

僕は、それを聞いてまたびっくりして一郎さんを見た。一郎さんは「それはだめだよ、今度の森林学校じゃなくなつて家のすぐ近くにあるんだからいつでもいけるだろ！」

と怒ったような口調で言ってくれた。でも、珍しくお父さんは一郎さんに反対して

「何言っているんですか！今の季節は取材で忙しいのでまったく山にいけないんですよ。」

だから今の季節のあの山入ったことがないんです。」

と言った。一郎さんも負けずに言い返す。

「だが、きみなら勝手に休暇をとってでもやまにいくとおもったんだが。」

確かにそのとおりだ。しかしお父さんもあきらめない結局負けたのは一郎さんだった。

一郎さんは、取材を許可してばくに手を合わせて誤りながら会社に帰っていった。

それで僕は、がっかりしながら今日を迎えた。

しかしお父さんは寝坊して、どうやらみんなについて来ていないみたいだ。

それで僕はバスのことと、お父さんのことに喜びながらとうとう泊まる場所滝川荘についたのだった。

答え

1 アイロン

2 9秒(急病)
三秒(急病)

3 二個

4 あぐら

5 かつお

6 わし(わ2+わ2=わ4)

7 まるで絵になってない。で「え」じゃなくなったから

8 とんかち

9 気(木)が変わったから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6464a/>

山頂の事件

2010年10月9日21時03分発行